

SSKO

Drug Addiction Rehabilitation Center

DARC

Grow up!!

栃木ダルク

ニュースレター 第51号(2007, 7, 14)

はや10年・・・

栃木 DARC 代表 栗坪千明

うっとうしい雨の日が続く今日この頃、皆様におかれましては健やかなることとお喜び申し上げます。

さて、私が8年間の薬物依存生活に終止符をうち、ダルクでの回復プログラムに入ってから、今月の7日で10年を迎えました。これも私のまわりにいる人たちのご支援のおかげと感謝しています。

1997年7月7日に茨城ダルクに入寮しました。疲れ果てていました。3年間に及ぶ覚せい剤の連続使用の結果、クスリにコントロールされて、人生がめちゃくちゃになっていました。でも自分から回復のレールに乗ったわけではありません。両親に連れられやっと入寮したのです。茨城ダルクには岩井代表が居ました。私と父と叔父の3人で相対すると「本人はみんなのところへ」と言われ、別の部屋でスタッフと入寮手続きに入りました。晴れた暑い日で畳敷きの通称ビギナー部屋という10畳ほどの部屋の一角ではテーブルを囲んでマージャンをしている人たちが居ればその横では汚らしい猫を抱いてテレビを見ている人がいました。マージャンパイを混ぜるジャラジャラと言う音とテレビの入り混じった部屋と外の暑い黄色い景色。これがダルク初めての記憶です。入寮者台帳という用紙に自分のことを書き終え手渡すと、目の前のスタッフに「シャブ？」と聞かれました。こんなにはっきりと（しかも明るく）薬物の事を聞いてくる人に今まで出会ったことはないので私は口ごもりながら「・・・はい」と返事をしました。使用薬物の欄には「覚せい剤」と記入されました。いろいろと施設生活における注意点などを10分ほど聞いています。

外の駐車場に父たちの姿が見えました。父と叔父は私に手を振ると車に乗り行ってしまいました。なにか捨てられた猫のような気分だったのを覚えています。

あの日から、はや10年です。入寮者からスタッフになり、そして4年前には栃木に施設を開設しました。良いのか悪いのかあつという間でした。クスリを使い始める前までは、とても長く感じられた時間がクスリを使い始めるととても早く感じられました。それもクスリを使用する一つの要因でした。しかし皮肉な事にクスリを使っていない今も時間が過ぎていくのがとても早く感じられます。これも一日一日が充実しているからだと思います。

うまくいくこともうまくいかないことも、この仕事をしているととてもわかりやすく感じられるような気がします。クスリを使い続けていると薬物依存症になり、この依存症は慢性病であり、行き着くところは死であるという事実は私たちの中では、当たり前のことなのですが、一般にはなかなか理解はされません。そのことが、治療の場に繋がってくる事を遅らせているとも思いますし、リハビリ施設でのダルクに期待している事も一般の理解とはずれがあると思います。

私たちがいつもたたかい続けているのは、相手に自分たちの考え方が、なかなか伝わらないと言うことです。何も考えていないように思われがちです。高慢な言い方になるかもしれませんが、私たちスタッフは自分たちの経験をもとに仲間と私たち自身の回復を考えたプログラムを毎日必死で実践しています。これもなかなか理解されにくい事ではありますが・・・多分いつもこの無理解を理解に繋げようという活動をし続けているから時間が早く過ぎ去っていくのかもしれませんが。

厚生労働省や法務省などの省庁が薬物依存症の回復に目を向けた新たな動きを始めています。何年か前に比べれば、これは大きな一歩だと思います。政府が一般に向けた活動をしていく事により、薬物依存症の正確な理解に繋がる事でしょう。

自分にとっての社会復帰

QOO

私がダルクに出会ったのは、平成14年11月に地元の横浜ダルクに病院から通所したのがはじめてでした。最初の印象は「うわあ～こんなに俺より狂っている人達が居る！！」「やば～いところ来ちゃったな～」が第一印象でした。ですから病院を途中で退院した私がそんな施設に行くわけもなく、NAに行くわけでもなく社会復帰を果たそうと早々に仕事を見つけて働き出した訳ですが、病気（薬物依存症）とっていない私は案の定、仕事が続かずスリップをして再入院をし、ついに「ダルクは病院で治らない？？重症な狂ってる人達だけが行く場所」と思っていたダルクに逃げ込むことを選ぶことになっていきました。

当時の横浜ダルクのパフレットを見ると3ヶ月間のプログラムと書いてあったので狂っていた私は、「俺はあの人達ほど狂ってないから1ヶ月だな！！」って勝手に思い込み、当時は結婚していましたので早いとこプログラム（治療）を終えて幸せに暮らそうと・・・本気で思っていました。

その思いとは裏腹に、施設側の提案は一切守らずに電話を妻にしたり密会したりと、自分で囚われる原因を作り出しては眠れない夜を過ごしていました。その後・・・連絡を取り合っていた妻との仲は険悪な方向へ進んで行き、結末は「離婚届に印を押すから売人の電話番号を教えてくれ！！」「俺はシャブで知り合ってシャブで別れる最低な男だったと思ってくれ！！」と狂った台詞を吐き、妻を巻き込んで自宅に帰り再使用をしました。

後先も考えずに・・・仕事もせず・・・愛していたはずの妻を巻き込み・・・

2泊3日後の夜にもう妻は傍に居ませんでした、ダルクに電話すると「今すぐ帰って来い！！」とスタッフの声、その時「一番狂っていたのは俺なんだ・・・」って気づかされました。その後母に電話しました「施設に帰る・・・帰って将来有給スタッフになって社会復帰します！！」と言って残った小銭で電車に乗り12月24日のNAバースデーミーティングに辿り着きました。

大泣きしながらのミーティング、仲間から「QOOのONE DAYが最大のプレゼントだよ！！」って言われて・・・あの日のことは今でも忘れられません。

翌日にはハイパーパワーの配慮で長野ダルクへ移動し新たな生活が始まりました、しかし色々なものを失い自暴自棄になっていた私は「死にたい病」になっていました。

1976年2月25日第三種郵便物認可（毎週4回月曜・火曜・木曜・金曜発行）
2007年7月17日発行 SSKO 通巻第6465号

妄想にも駆られ、幻聴と遊び、目の前に居る一緒に生活している仲間と共に心通わし
生きることができていませんでした。

最終的に仲間と騒動を起こして入院し、その後のあり方を考える時間を与えられまし
た。最終的に場所を変えてもう一度プログラムを受けることを選択して栃木ダルク（当
時の那須ダルク）へ移動しました。

翌年の2月から施設のお手伝いをする機会を与えられ、当初の想い「有給スタッフにな
る！！」が一步近づいた思いでした。しかし役割を与えられたことを勘違いし、コ
ントロールしやすい（言い易い）仲間には強く声を荒げ、コントロールしにくい（強
い・怖い）仲間には言わない、という自分を感じたりと、その他にも沢山の見たくな
いを自分が如実に感じる日々が与えられました、今考えると役割をすることでクスリ
を使うこと以外の病的な部分を色々と出ささせてもらったことに感謝です。

女性・SEX・ギャンブルと依存は移行して回復を続けながらも中々楽にならない日々
が続きました、「こんなに苦しいならばいっそのこと使ってるほうがいい！！」って思
ったことも何回もありましたが、そんな頃に仲間がスリップしたり施設を出て行って
捕まったり、病院に担ぎ込まれたり、死んだり、仲間の姿でいつも助けられました。
今年のコンベンションの後、本気でこの先もスタッフをやっ払いこうと決意した頃、
先行く仲間の提案で役割を手放し宇都宮 OP での社会復帰のプログラムへと移行しま
しました。正直言って受け入れられなくて半分腐っていました、仕事を探すのも半分は先
行く仲間への逆切れパワーゲーム状態で一向に見つかりませんでした。そんな気持ち
も毎日のミーティングで吐き続けて気持ちが良い方向へと（逆怨み→感謝）向かった
頃に、今働いている会社への就職が決まり今年の2月からアルバイトが始まりました。

「ダルクにいます」「覚せい剤を使って薬物依存症です」「週3日しか働けません」「犯
罪歴があり現在保護観察中です」こんなこと言ったら絶対に見つかる訳ないという事
実を積み上げようとしていたんですが、全ての条件をクリアして就職が決まりました。
約3ヶ月間の週3日、その後週4日に増えてゆっくりとこの5年間鈍っていた心と体
を少しずつウォーミングアップして働き出せていることにも今となっては感謝のひと
言です。

最近をよく昔の仲間が「働くために生きているんじゃない、生きるための糧として働
くんだよ！！」という言葉が良く頭をよぎります。役割がスタッフではなく一般社会
の会社という場所で新しい仲間（職場の）との人間関係を築くプログラム（役割）を
与えられているんだという感覚で受け止めています。

最後になりましたが、再びハイパーパワーが私に与えてくれるならば、遠い将来にも

う一度仲間と共に暮らし、色々な方々のご支援を頂いて、未だ手の届かない国や地域の未だ苦しんでいる仲間にあウトリーチしていくことができるように、私が今できることを「今日1日」続けて、夢を目標にして実現できるように祈り続けて生きていきたいと
思います。

7月8日 那須フェア カホン演奏で参加しました。思っていた以上にたくさんの人達が見に来ていました。練習不足でミスを連発でした今後はもっと練習をして色々なイベントに参加したいと思っています。



献金のお願い

夏らしい日の強さを感じられるようになってきましたが皆様におかれましてはいかがお過ごしでしょうか、さて夏になりメンバーたちはプロカラムを今までの施設内中心から施設外でのイベント参加などが多くなります。出来るだけ家族の負担を減らして参加させてあげたいと思っております。

またスタッフのレベルアップの為の研修会にも出来るだけ参加をしたいと思っております。つきましてはいつもお願いばかりで心苦しい限りですが献金をお願いいたします。

編集

栃木DARC

宇都宮OP

那須TC

〒320-0014

〒329-3225

栃木県宇都宮市大曾 2-2-14

栃木県那須郡那須町豊原丙 3227-2

形松ビル 3F

TEL 028-650-5582 FAX 650-5597

TEL 0287-77-7157 FAX 77-7158

ホームページアドレス <http://www.t-darc.com>

Eメール:nesm@t-darc.com

6月献金、献品を下された方々

大藤禮子様、真野高広様、アクション栃木家族会様

聖血礼拝修道院様、金井恵美子様

山本はるひ様、栗坪誠様

匿名10名様

毎月献金、献品を戴きましてありがとうございます。

これからも宜しく願いいたします。

発送作業簡略化の為、振込み用紙は全員に同封させていただいております。ご理解の程よろしく願いいたします

発行所

郵便番号一五七〇〇七三 東京都世田谷区砧六一二六一二一
特定非営利活動法人障害者団体定期刊行物協会

定価1000円